

PDCA

教育の論理では、PDCA（すなわち、P計画、D実践、C検証、A再挑戦のことですが）はありえないというのは、本当でしょうか。影響力の強い教育評論家といわれる方の中に、こうしたことを声高に発言される方がいらっしゃいますが、私には理解できません。

私は教師の経験がありませんので切り口が違うかも知れませんが、どのような仕事であってもやりっ放しで良いというものは一つもないはずです。勿論、それは、教育でも同じなのではないでしょうか。ですから、「PDCAは教育に馴染まない」といわれると果たしてそうだろうかと思ってしまう。

自分が取り組んだ仕事について、想定した成果を上げたのかどうかを検証することは、その仕事がどのようなものであれ必要でしょう。いくら自分は頑張っているといっても、その成果を検証しなければ、それは所詮自己満足に過ぎません。にもかかわらず、教育については検証が不要というのは何故なのでしょうか？

検証するということは、自分の実践の結果が第三者に見えるということであり、教員の中には、それが自分の評価と結びついていくことへの懸念、もっといえば「恐れ」があるのではありませんか。全国一斉の学力調査に反対するのも、そうした背景があるのではと思ってしまう。

成果主義といいますと、順位付けにつながるとか、競争を煽るといったように、反発する教員がいますが、私は逆に、学校の中だけはお互いに競争せず、仲良く楽しく過ごせれば良いというような考え方の方が、問題ではないかと思っています。

成果というのは、誰にとっての成果なのかといえ、それは第一に子どもたちということです。先生が頑張るのは当たり前、その上で、一人ひとりの子どもたちが、それぞれの教師との学びを通じてどれだけ力を付けたかということ

が問われなければなりません。

勿論、その場合の力は点数での評価が可能な学力に止まるものではありませんが、教師の皆さんは、自分が教えたことによって子どもがどう変化したか、どこまで成長したかをできる限り客観的に検証していく努力をすべきです。そうしなければ、指導力の更なる向上など望むべくもないでしょう。

仮に、教師が教えたことの結果の検証を避けたとしても、卒業した子どもたちの姿そのものからは逃れることはできません。

社会に送り出した子どもたちが、どのような人生を選択し、また生きているかということは、学校教育による成果の一つだと思うからです。

もとより、学力向上という問題一つを取り上げても、それは学校だけで、教師の力だけで解決するものではありません。家庭や地域の関わりもまた重要であることは、いうまでもありません。

しかし、子どもたちの躓きを、「子どもたちの努力が足りなかったから」とか、「親の協力がなかったから」といったことを理由にして自分を納得させるような教師であれば、卒業した子どもたちにとって心に残る教師とはなり得ないだろうな、ということだけは申し上げておきたいと思います。

(塾頭 吉田 洋一)